

シニアわんこの ハッピーライフ



著 千村どうぶつ病院

監修 千村収一（千村どうぶつ病院 院長）

はじめに

人と犬との関係は大昔から続いてきています。犬も最近では家族の一員としてかわいがられるようになり、人と同じように寿命も年々延びてきています。これは犬が飼われている環境が良くなったことや良質のペットフードが普及したこと、また獣医学の進歩によるところが大きいと思います。

しかし犬も歳を重ねると人と同じように癌や心臓病になったり、ボケてしまうこともあります。老いはいたしかたないのですが、病気は早期に発見することによって治療したり、進行を遅くしたりできます。毎日、動物の診療を行っている獣医師から、飼い主さんに知っておいて頂きたいシニア犬の病気をまとめてみました。この冊子が大切に犬をかわいがっておられる飼い主さんのお役に立つことを願っています（千村収一：千村どうぶつ病院 院長）。

Contents

- 001-003 **シニアって何歳から？** 加齢に伴い現れる兆候と注意点
：小林慶哉（千村どうぶつ病院）
- 004-005 **犬の心臓病** シニアわんこの代表的疾患：長哲（同）
- 006 **犬の腎臓病** 適切な食事管理と早期治療が大切：小野崎崇（同）
- 007 **犬の腫瘍** 高齢とともに発生しやすい病気：小林慶哉（同）
- 008 **犬の糖尿病** 食事管理・インスリン注射が必要：長哲（同）
- 009 **犬の肥満** 運動量が低下するシニア期は特に要注意：小野崎崇（同）
- 010 **犬の変形性関節症** 体重管理で関節への負担軽減が大切（大型犬は特に注意）
：片山智博（同）
- 011 **その他 加齢に伴い発症しやすい病気**
変わったことがあれば早めに動物病院へ：平島享（同）
- 012-013 **環境づくりと食事管理のポイント** 幸せなシニアライフのために
市橋理沙（同）
- 014 **犬の痴呆と介護** 犬の気持ちに立ってあげることが大切：平島享（同）
- 015-016 **たいせつな定期健康診断** シニア犬と幸せに暮らすために
市橋理沙（同）

シニアって 何歳から？

小林慶哉

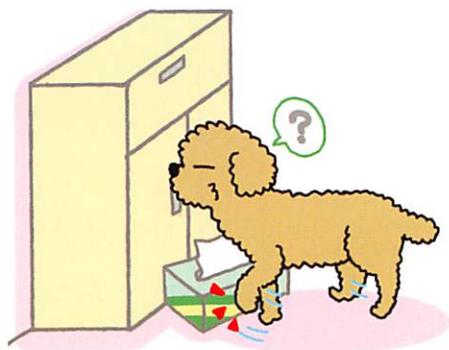
近頃、犬はただのペットとしてではなく、もはや家族の一員というべき存在になっています。住環境、食生活などに気を遣う飼い主が増えてきたことで高齢化が進んでおり、小型犬では20歳近くまで生きる犬もめずらしくありません。犬は人より数倍早く歳をとり、衰えていきますが、そのスピードはもちろん大型犬と小型犬では異なりますし、犬ごとでも個体差があります。

犬では約8歳を越えたくらいからシニア世代となります。人に換算すると50歳前後となり、活動性や食欲、飲水量など徐々に変化が表れてきます。このような変化には単純に加齢性の変化である場合と、病気による症状である場合があります。日頃から注意深く観察をして、気になる変化があれば、動物病院で診察をしてもらいましょう。

シニア世代になってくると、見た目にも様々な変化が表れてきます。主な変化として以下のようなものがあります。

● 眼が見えにくい

眼が見えにくくなると、物にぶつかるようになってたり、高いところから落ちたりするようになるため、飼育環境に注意が必要です。加齢に伴って、眼が見えにくくなる病気として、代表的なものは白内障があります。気になる症状がある場合は詳しく検査をしてもらいましょう。

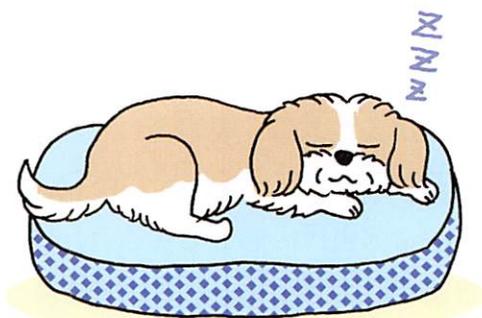


● 耳が遠い

耳が遠くなることで、呼びかけに反応しなくなったり、他の犬の鳴き声、車や雷の音などを気にしなくなったりします。

● 寝ている時間が長い

一日の中で寝ている時間が長くなります。散歩に行く時間も短くなり、筋肉が落ちて足も徐々に細くなってきます。運動量が減り、爪も硬くなってくるため、爪も削れに



くく伸びやすくなってきます。活動性低下の原因として、心臓病やホルモンの病気などが潜んでいる場合もありますので、動物病院で相談しましょう。

● 毛や皮膚の変化

毛づやが悪くなり、白髪も多くなってきます。また、全体に毛が薄くなってくることもあります。さらに、シーズーなどの犬種では、体の表面にポリープが多数できてくることもあります。中には悪性のがんであることもありますので、急に大きくなったり、はじけたりすることがないか、こまめにチェックしましょう。



● 口がにおう

小さい頃から歯磨きをしていないと、歯石の沈着や歯周病から口臭が強くなってきます。歯磨きをすることで、さらなる歯石の沈着を防ぐことができます。



犬の心臓病

長 哲

心 臓病はシニア犬ではよく見られる病気です。特にマルチーズやシーズーなどの小型犬、キャバリア等の犬種では僧帽弁閉鎖不全症という病気がよくみられます。これは、左心房と左心室という二つの部屋を仕切る僧帽弁という弁が変性し、弁のしまりが悪くなることで、血液が逆流するようになる病気です。

この病気は初期の段階では症状がほとんどみられないこともあり、ワクチンや健康診断の時に聴診器で心臓の音を聴くことによって、異常が発見されることもあります。初期症状は、なんとなく元気がなく疲れやすい、食欲が落ちてくるなど、加齢による変化とあまり区別が付きません。

進行してくると、心臓に負担がかかり、次第に心臓は大きくなって、最後には全身に血液をうまく送り出せなくなってしまいます。こうした状態を心不全と呼びます。心不全になった犬は運動するとすぐに疲れてしまったり、咳がひどくなったり、失神発作や体にむくみがみられたりします。心臓病の進行度合

は、レントゲン検査や超音波検査を行なうことによって調べることができます。

残念ながらこの病気になる原因はよくわかっておらず、また、一度かかってしまうと完治させることはできません。しかし、薬によって症状を改善し、病気の進行を遅らせ寿命を延ばすことはできます。また、減塩食や運動量を制限することも病気の進行を遅らせるためには重要です。

まずはシニア世代を迎えた犬は動物病院で健康診断を受けて、早期発見を心がけるのがよいでしょう。また、僧帽弁閉鎖不全症になってしまった時は、獣医師とよく相談し、病気と上手に付き合っていきましょう。

呼吸が苦しそう



体重の増減



歩きたがらない



ふらつき (めまい)



病気のサインに要注意

適切な食事管理と早期治療が大切

犬の腎臓病

小野崎崇

腎臓の主な機能は、体に不必要になった老廃物や毒素を尿と一緒に排泄することです。腎臓の機能が低下すると老廃物や毒素が十分に排泄されなくなり（腎不全）、全身の臓器にさまざまな障害を与えます。

初期症状としては、元気や食欲が低下し、飲水量が増え、それに伴い薄い尿を多量に排泄するようになります。さらに症状が進行すると体重減少、貧血、下痢、嘔吐などの症状が現れ、末期になるとけいれんなどの神経症状が出ることもあります。

高齢の犬に起こる慢性的な腎不全は、完治することは難しいですが、早期に発見できれば、たんぱく質を制限した適切な食事管理と治療により病気の進行を遅らせることができます。元気や食欲、体重、尿に変化がみられたら、早く動物病院で血液検査や尿検査を受けましょう。



飲水量とおしっこの量
の変化に注意

犬の腫瘍

小林慶哉

犬も高齢になってくるとがんの発生が多くなってきます。胸やお腹の中のがんは見た目ではなかなかわかりませんが、体の表面にできるがんについては、日頃からスキンシップをしたり、体を良く触ってあげることで早期発見することができます。

●乳腺腫瘍

いわゆる乳がんで、乳頭周囲の皮膚の下に豆粒や米粒くらいのしこりが触れたら要注意です。犬の場合、良性と悪性の確率はほぼ半分と言われており、確定診断するためには、手術でしこりを摘出する必要があります。

●肥満細胞腫

「肥満」という名前がついていますが、太っている犬にできやすいわけではありません。皮膚がんの一種で、見た目にはただの虫さされのように見えることもあります。パグではこの腫瘍が皮膚に同時にたくさんできることもあります。

犬の糖尿病

長 哲

犬 も人と同じように糖尿病になることがあります。原因としては、フードやおやつとの与えすぎや高栄養な人の食べ物を与えてしまうことで肥満になってしまうことが考えられます。

糖尿病は字の表すとおり、尿の中に糖が出るくらい血液中の糖の数値が上昇してしまう病気です。正常であれば、血糖値が上がると膵臓からインスリンが分泌され血糖値は正常値に下がります。しかし、糖尿病の犬ではインスリンの分泌量が低下したり、インスリンの感受性が低下することで、血糖値のコントロールができない状態になってしまっています。

症状としては異常な飲水量の増加、それに伴う尿量の増加が特徴的です。糖尿病が進行すると白内障や腎炎、膀胱炎を併発することがあります。犬の糖尿病の治療は、人と同じように食事の内容や量をしっかり管理し、生涯インスリンの注射が必要になります。

犬の肥満

小野崎崇

肥満とは余分な脂肪の蓄積によって体脂肪率が増加した状態のことです。肥満の原因としては遺伝、運動不足、高カロリーの食事の過剰摂取などが挙げられます。また、不妊手術後にホルモンバランスが崩れ、太りやすくなることもあります。老齢になると、運動量が低下し、必要なエネルギー量が少なくなるので、若い頃と変わらない食事量を与え続けてしまうと、余分なエネルギーを脂肪に換えて身体に蓄積して太る傾向があります。しかし、腹水や大きなできものがお腹の中にある場合やホルモンの異常などでも、お腹がふくらんでくるため、単純な肥満と区別がつきにくいことがあります。

年をとってお腹周りがふっくらしてきたことに気付いたら、ただの肥満と思わずに動物病院で検診、検査を受けることをおすすめします。



体重管理で関節への負担軽減が大切(大型犬は特に注意)

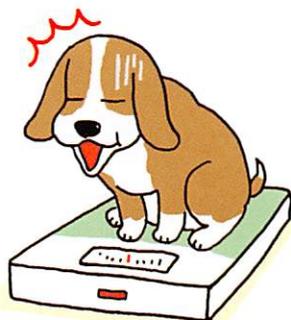
犬の変形性関節症

片山智博

変形性関節症とは関節軟骨やその周囲の組織に変化が起これることで、関節のクッション性や柔軟性などが徐々に失われてしまう疾患です。

レトリバー種などの大型犬は股関節や肘のトラブルが多く、チワワやプードルなどの小型犬は膝のトラブルが多く認められます。しかし、生まれつき関節や骨に異常があり歩き方がおかしい場合でも、飼い主が小さい頃からその歩き方に見慣れてしまっていると異常に気付かないこともあります。

変形性関節症は老化に伴い進行してくるため、体重の管理が大切になってきます。一般的に体重は少し痩せ気味の方が、関節にかかる負担は少なくなり、進行は緩やかになります。歩くことを嫌がっていたりいつもと違う歩き方をしている場合には、早めに動物病院に行くことが大切です。



体重管理をしっかりと

その他、加齢に伴い発症しやすい病気

平島享

◆歯周病

歳を重ねるごとに歯石が付くようになり、歯肉に炎症が起きやすくなります。悪化すると、硬いものが噛めなくなり、歯がぐらついたり、折れたりします。

◆老齢性白内障

老齢になると水晶体が白く濁り、物が見づらくなることがあります。進行すると手術が必要になりますが、初期であれば薬で進行を遅らせることもできます。

◆子宮蓄膿症

避妊していない雌犬にみられ、主に発情周期に伴って分泌される性ホルモンにより子宮内の免疫力が低下することで細菌感染がおこり、子宮に膿が溜まってしまう病気です。老齢になるほどなりやすく、放っておくと死んでしまうこともあります。

◆前立腺肥大

去勢していない雄犬にみられ、精巣から分泌される性ホルモンの異常分泌により前立腺が徐々に肥大していきます。進行すると、尿漏れなど排尿の異常が起きたり、前立腺肥大により直腸が圧迫され排便障害やしづり（腹にはりがあり、便意があってもうまく排便できなかったり、排便があった後もすぐに便意をもよおしたりする状態）が生じることがあります。

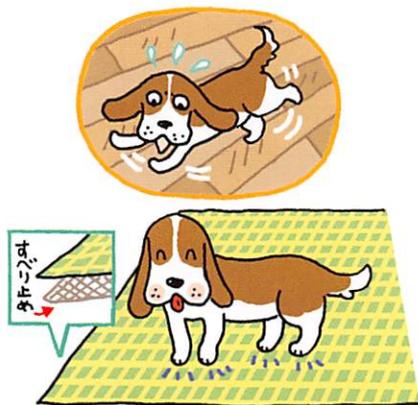
変わったことがあれば早めに動物病院へ

環境づくりと 食事管理のポイント

市橋理沙

老犬になると、運動能力や視力が衰えるため、段差につまずいたり、転落事故が起きたりする可能性が高くなります。気になる段差には、敷板を置いてスロープをつけたり、飼い主が抱っこして昇り降りするなど補助してあげましょう。また、フローリングの床は滑りやすく、足腰を痛める原因になる場合があります。じゅうたんやマットなどを敷いて滑らないようにし、爪や足裏の毛は短くしておくことをお勧めします。

また、老犬になると体温の調節機能が低下するので、温度管理にも十分注意する必要があります。特に屋外で飼っている場合、暑い日は木陰や室内に入れて水を十分に与えたり、寒い日は毛布を敷くなど生活環境を整えてあげるとよいでしょう。



住環境にも配慮が必要

老犬になると、運動量も減り、基礎代謝も低下するので、食事でもシニア用ドッグフードに切り替えるようにしましょう。シニア用ドッグフードは、成犬用に比べてカロリーが低く、たんぱく質や脂肪の量も少なめになっており、老犬に不足しがちなビタミンやミネラル、カルシウムなどがしっかりと配合されている上、消化吸収性を高くするよう配慮されています。個体差はありますが、7歳を過ぎた頃から少しずつ老化の兆候が見え始める場合が多いので、その頃から徐々にシニア用ドッグフードに切り替えていくのが良いでしょう。

老犬の食事で気を付けなければならないのは、高カロリー、高脂肪、高塩分のものを与えないということです。そのようなものを与えると、肥満や糖尿病や高血圧などの病気を招いて、愛犬の寿命を縮めてしまうことにもなりかねませんので、日々の食事管理には十分注意しましょう。



シニア用の食事に切り替え

犬の痴呆と介護

平島享

犬も歳を重ねるにつれて学習したはずのことを忘れてしまったり、自由に動けなくなったりする、いわゆる痴呆が増加していきます。痴呆は13歳を過ぎる頃から増え始め、主に柴犬などの日本犬に多くみられます。症状としては、昼夜逆転し、夜中に意味もなく鳴き続ける、円を描くように歩く（巡回運動）、狭いところに入りたがるがでてこられない、自分の名前を忘れてしまい何事にも無反応になる、よく食べて下痢もしないが痩せてくる、トイレを失敗する、などがあります。

痴呆犬が、少しでも快適な余生を送れるように飼い主側も犬の気持ちに立って介護してあげることが大切です。晴れている日は、できる限り日光浴をさせてあげたり、ゆっくりと散歩させてあげたりすると良い刺激になって痴呆を遅らせたり改善させる効果があるといわれています。



たいせつな 定期健康診断

市橋理沙

老犬になると体力が落ち、いろいろな病気にかかる心配は増えてきます。身体の中で進行している病気を早い段階で発見して、早期治療を行うためには、定期健康診断が重要になります。5歳を過ぎたら1年に1回、8歳を過ぎたら半年に1回は定期健康診断を受けるのが望ましいでしょう。

一般的な検診では、まずは体重の増減、体温をチェックします。また、眼の病気、外耳炎などの耳の病気、歯周病など口腔内の病気、皮膚病がないかどうか、歩き方や姿勢は正常か、触診によって腫瘍などはないか検診します。

さらに、血液検査や尿検査、便検査をはじめ、レントゲン検査や心電図検査、超音波検査などを行って、血液や心臓、その他の臓器に異常がないかどうかを調べます。症状が出てからでは手遅れになってしまう場合もあるので、定期健康診断を受けるよう心がけましょう。

病気を早期発見するためには、愛犬からの病気のサインを飼い主が見逃さないようにするということがポイントです。

食欲が落ちてないか、飲水量に変化はないか、排尿・排便に異常はないか、体重の急激な増減はないか、散歩など運動量が落ちていないか、咳・くしゃみがないか、嘔吐はないか、皮膚の状態は問題ないかなど、日々観察しておくことをお勧めします。

もし犬に何か変化がみられた場合、それが加齢によるものなのか、病気によるものなのか、一度動物病院を訪ねて診てもらうのがよいでしょう。

覚えて
おきたい!

犬のお薬飲ませ方&使い方テクニック

錠剤の場合



1 上下の顎を掴み、口を開かせる。



2 錠剤をのどの奥に置き、口を閉じる。



3 口を開かせないように押さえたまま、喉元を撫で飲み込ませる。

粉薬の場合



1 口の横の少したるみのある部分を広げる。



2 指に粉薬をつけ、口の横の粘膜に塗り付ける。



3 頬を軽くもむようにして飲み込ませる。

※嫌がる犬に粉薬を直接飲まそうとすると、誤って気管を詰まらせることがあるのでご注意ください。

あなたの愛犬こんな症状ありませんか？

● …よく見られる
● …時々見られる

症状別早期発見チェックリスト

どこが おかしい	病名・病状	ウチの子 チェック	僧帽弁 閉鎖 不全症	慢性 腎不全	乳腺 腫瘍	肥満 細胞腫	糖尿病	変形性 関節症	老齢性 白内障	歯周病	子宮 蓄膿症	前立腺 肥大	痴呆
目	目が白く濁っている						●		●				
	口臭が強い			●						●			
口	歯肉が白い		●	●									
	歯がぐらつく									●			
腹	心臓の鼓動大		●										
	乳房にしこり				●								
皮膚	虫さされのような腫れ					●							
	排便・排尿が困難											●	
便・尿	多飲・多尿			●			●				●		
	失禁する						●					●	●
体調	元気がない		●	●							●		
	咳をする		●										
	呼吸が荒い		●										
	運動を嫌がる		●					●					
	食欲不振			●							●		
身体	嘔吐する			●			●				●		
	やせてきた		●	●			●						
生活	貧血		●	●									
	足を引きずる							●					
	起き上がり鈍い							●					
	階段を嫌がる							●					
	ジャンプできない		●					●					
	狭い所に入りたがる												●
備考	異様な鳴き声を発する												●
	夜中に放浪する												●
	掲載ページ		4	6	7	7	8	10	11	11	11	11	14

Column

わんちゃんは「調子が悪い」と言えません

わんちゃんは「痛い」「苦しい」と思っても言葉で伝えることはできません。特に病気の初期段階は症状が軽いので、毎日接している飼い主さんでも気づくのが難しいケースが多くみられます。定期的に健康診断を受けることで、病気を早く見つけられますし、何も異常がなければ安心して生活できますね。



ずっと
一緒に
いたいから



●気になることがあれば当院へご相談ください。

 **NOVARTIS**
ANIMAL HEALTH

ノバルティス アニマルヘルス株式会社
東京都港区西麻布4丁目12番24号

ノバルティス カスタマーサービス TEL.0120-162-419
月～金 9:00～12:00 13:00～17:00(祝祭日除く)

FTK1008-84-MS